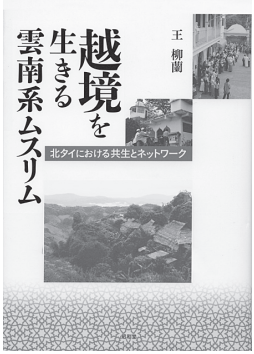
王柳蘭著

越境を生きる雲南系ムスリム
――北タイにおける共生とネットワーク

昭和堂／2011年3月／404頁／5985円



松本ますみ

本書は、日本で生まれ育った華人の文化人類学者、王柳蘭が北タイで雲南出身の華人、それもムスリムの移住の歴史、口述史、生活実態、宗教生活、ホスト社会やその他の社会に向けてのネットワークのありかたをまとめた研究である。王は一九九五年から二〇〇〇年まで、一八カ月の長期フィールドワークを含む調査を北タイと雲南省で行い、その後二〇〇九年までの北タイでの断続的調査を行った。最初、民族植物学的調査に出かけたフィールドで王が偶然出会ったのは雲南出身のムスリムとそのコミュニティであった。親交を重ねる中で、王は多くの雲南系ムスリムの話をきき、その人々の尊厳をかけた生き方を記録することを決意する。数は少ないし政治的影響力もほとんどない。そのような「小さな民」をある国家や社会はどのように扱っているのか、そして自らのポジションをその「小さな民」はどのように保とうとしているのかは、文化人類学はもとより政治的テーマであろう。まして、それが複数の国家社会に跨って住む民であればなお

さらのことである。

一般的にいって、タイの潮州系・福建系華僑・華人研究には先行研究が多くある。しかし、北タイの華僑・華人研究には蓄積が少なく、さらに北タイの華僑・華人の一部である雲南系ムスリムに関して綿密なフィールドワークに基づく調査研究は今永清二のいくつかの仕事を除きほとんどなかった。その意味では、本書は画期的な業績といえるだろう。また、王が調査をした時期はタイと中国が経済成長を成し遂げ、モノ、カネ、ヒト、情報のネットワークが飛躍的に拡大する時期とも重なっている。王が描き出すのは、「小さな民」マイノリティはマジョリティの事情に翻弄されるだけの脆弱な存在ではない、ということを証明する様々な事例だ。あるものは時代の波に抗い、あるものは棹差し、ホスト社会や国際社会の政治・経済体制と折り合いをつけ交渉しながら、自らの生き残り戦略を立てている。このようにマイノリティの視点に立って地域をみる、歴史をみる、国際社会との連環をみる、という複眼的な視点はこれからますますグローバル化し流動化する社会において重要であろう。

まず、本書で取り上げられるビルマ／タイ国境地帯に住む雲南出身の華人について概説してみよう。中国は東西南北に隣国と長い国境を接しているが、冷戦時代にクローズアップされてきたのは北方・西方のソ連・モンゴルとの蜜月から対立へ至る国際関係であろう。しかし、西南部の雲南のビルマ、タイ、ラオス国境地帯における国民党軍の残党の反共闘争は相対的にメディアや研究者によって取り上げられることは少なかったように思える。情報の欠落の風穴を開けたのが、一九九五年の歌手テレサ・テンのタイ、チェンマイでの客死であった。彼女は北タイの国民党軍の残党を慰問に行っていたのではないか、というような怪情報が乱れ飛んだが、その噂もいつしか消え、多くの人々の記憶から北タイの国民党軍とその子孫の存在は忘れ去られてしまった。それは、冷戦が終結し、天安門事件を経て中国が世界に眼を向けた急速な経済成長を成し遂げる時期とほぼ期を同じくしている。しかし、冷戦が終わっても北タイの国民党軍の残党、子孫、そして政治・経済的理由から故郷中国を後にした華人が消えたわけではない。今でも漢語を話し、出身地雲南の習慣を保持して生きている。彼らを雲南系華人と呼んでおこう。雲南系華人はタイではかつて法的管理上、ホーあるいはチーン・ホーと総称された。現在、雲南系華人は法的には無国籍者、中華民国国籍保持者、タイ国籍保持者と大きく三分される。さらには、そのエスニシティをみるとムスリムと非ムスリムに二分される。北タイの雲南系ムスリムの人口は一万から二万とされる。

ここで、表題の「雲南系ムスリム」について少し説明しておこう。雲南省は中国の西南に位置している内陸省である。南詔国（七世紀半ば～一〇世紀初）、大理国（一〇世紀初～一二五四年）を経て、元のフビライの時代に中国の版図に取り込まれた。雲南を統治したのは中央

アジアのブハーラー出身のムスリム、サイイド・アジャッル・シャムス・ウッディーン（中国名で賽典赤・贍思丁）だった。それから七〇〇年あまりたつが、今でも雲南のムスリムはモンゴル時代に中央アジアから移住したものを祖先とするものが多い。

彼らの存在を世に知らしめたのは、一九世紀半ばの雲南回民起義（叛乱）である（回民とは一般に漢語を話すムスリムを指す）。清朝に徹底抗戦をしたムスリム指導者杜文秀らであるが、結局平定され、ムスリムは殺戮、奴隷化、土地没収などの憂き目に会う。一部はビルマやタイに逃亡した。ちなみに、当時英国領のビルマとの交易が二十年近くにわたる雲南回民起義を支えたとも言われる。

一九世紀末から二〇世紀初、雲南に隣接するビルマは英国の植民地に、ヴェトナムはフランスの植民地となっていた。税関や滇越鉄道の設立によって昆明が中国と世界を結ぶ貿易拠点になった。峻嶮な山岳地帯に囲まれた雲南はにわかに交易の要衝となった。その主役が、清朝の殺戮・弾圧の嵐を生き抜いた雲南ムスリムであった。彼らはラバや馬を連ねた馬幇とよばれる隊商を率い数カ月の越境交易の旅に出た。雲南の物資を運び、それを国境地帯の山地民に売る。売った資金でビルマ、ラオス、タイの物資を買って運び、雲南で売りさばくのである。雲南からビルマ・ラオス・タイに運ばれたのはタバコ、茶、布、コメ、鉄・銅・鉛、銅鍋や錫鍋など、逆に雲南に運ばれたのは禁制品のアヘン、サイの皮、鹿茸（ロクジョウ：鹿の角）など森の産品、象牙、宝石や翡翠などであった。彼らにとって国境の山岳地帯は、情報交換の場、旅の休息を得る場などであった。険しい山道、南方特有の病気、盗賊といった危険と隣り合わせの馬幇交易はそのリスクゆえ雲南系ムスリムに富をもたらした。

このような環境下、雲南系ムスリムは一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて、北タイで交易拠点やそのルート上にコミュニティを形成してきた。ムスリムと切っても切り離せないものがモスクである。チェンマイ県には二〇世紀前半までに建てられたモスクが三カ所あるが、そのうち二カ所の設立に雲南系ムスリムが関わっていることからも彼らの移民と宗教活動の歴史が分かろう。

この様相を一変させるのが、国共内戦と冷戦という政治状況である。まず、ビルマ／雲南国境での戦闘で国民党軍はいったん敗退する。しかし、「大陸反攻」の掛け声のもと、ビルマを拠点に一九五〇年ごろから国民党は「雲南省反共抗俄大学」をつくり「雲南反共救国軍」を組織した。雲南出身の漢人、ムスリムのみならずビルマの山岳民族も含まれた雑多なエスニシティからなるこの軍組織は一九五二年に一万二〇〇〇人にまで膨れ上がり、戦闘訓練や戦闘行為を繰り返した。しかし、国民党軍は一九五三年と一九六一年の二度にわたってビルマからの国外退去を国連から命じられる。国民党軍は雲南出身の漢人が多かったが雲南系ムスリムもその残兵や移民／難民の中に含まれていた。雲南系ムスリムは様々な事情を抱えてタイに移った。あるものは積極的に国民党軍に参加し、あるもの

は、たまたまビルマ滞在中に国民党の隊伍に強制的に組み込まれ、国民党軍に複雑な感情を抱いていた。あるものは、資産家や地主に対する「共産党の恐怖政治」を伝え聞いたり体験したりして、一九四六、七年ごろから五〇年代にかけて命からがら国境を越えビルマに逃げ込み、その後北タイに移った。かつて開いていた中国／ビルマ・タイ国境は厳しく閉ざされ、雲南系の人々は雲南に残した家族や友人に会えぬどころか消息も聞けない、そんな状況が改革開放の発動まで続いた。

そんな冷戦の状況下、ムスリムは雲南系漢人主体の国民党軍とともに「難民村」を北タイの国境地帯に形成した。度重なる戦闘と移住の果てに安住の地を見出したのだ。難民村は九〇カ所以上あるという。雲南系漢人と雲南系ムスリムが混住している村も数多い。雲南系ムスリムは、雲南系漢人と政治的、経済的、文化的協力関係を保って異郷暮らしの困難を克服してきた。

例えば、国民党の支配する台湾から支援を受け、中華学校の建設、住居改良、水道や道路などのインフラ整備がされた。中華学校では雲南系ムスリムと雲南系漢人の二世、三世が台湾から送られた教科書で漢語の勉強をしている。また、両者は共同して雲南会館という同郷組織を管理運営している。この組織は、台湾とのパイプをつなぐとともに北タイ各地に散在する「難民村」をネットワーク化させる機能を果たしている。

一方、都市化の波は北タイにおいても例外ではない。例えば北タイの中心都市チェンマイ市のバーン・ホー・モスクの周辺には、二〇世紀後半以後「難民村」から再移住したものが集まるようになった。その結果、ここは北タイ最大の雲南系ムスリム・コミュニティとなった。彼らのニーズに合わせハラール食品店やイスラーム宗教学校も作られた。例えば一九七二年にチェンマイ市に創建された宗教学校のアッタカワー（敬真）学校がある。この学校は、二〇世紀後半以後に中国共産党支配下の雲南から逃れてきたひとりのムスリムの多額の献金を中心として雲南系ムスリム、海外のムスリムが共同で作り上げた。現在は雲南系ムスリムのみならずインド・パキスタン系ムスリムも中東諸国への留学を目指して熱心に勉強している。イスラームの宗教言語であるアラビア語をまず習得し、クルアーンの内容を理解し実践するというのはムスリムにとって欠かせないことであるからだ。留学経験のある学生は中東発の新たな宗教知識を北タイにもたらしている。

こうした中で、一九八〇年代にはサウジアラビアから北タイの宗教学校に寄付が送られ、女性教育にも力が入れられるようになった。

国境やエスニシティを越えたイスラーム・ネットワークが最近になって活性化しているが、雲南系ムスリムは自らの雲南出身者であるというルーツを大事にしている。例としては次のようなものである。第一に、雲南系ムスリムのモスクにはアラビア語、タイ語、漢語の三つの名前があること。第二に、宗教的コミュニティの精神的中核たる宗教指導者（イ

マーム）は雲南系ムスリムが伝統的に受け継いできたこと。第三に、金曜礼拝では宗教指導者はタイ語と漢語で説教すること。第四に、改革開放以後、北タイの雲南系ムスリムと中国の雲南のムスリム（回族）との交流が活発になってきたこと。人的交流や情報の交換が進められ、中には北タイから雲南のモスクや宗教学校へ巨額の寄進をするものもでてきた。改革開放前に吹き荒れた社会主義政権下の宗教弾圧のために出身地雲南でイスラームが衰退したのを見かねてのことである。寄進は善行として世間的に褒め称えられるものだし、当人も善行をすれば天国にいけると信じている。また、マッカ巡礼では、雲南のムスリムが「探親」と称していったんビルマや北タイに出国してから雲南系ムスリムと合同で巡礼をしたという時期もあった。国境を越えた宗教的ネットワークは着実に再生されつつある。考えてみれば、親子、兄弟、姉妹、おじおばといった親族が無理やり国境に阻まれて分断され住むことを余儀なくされていたのが冷戦時代であったのだから、その時代が過ぎれば交流が再開されるのは当然のことである。交流を円滑にするために、雲南の地方官吏との人間関係の構築に彼らが努力を惜しまなかったのは言うまでもない。

タイに住み、タイ語を話しながら、中国への文化的帰属意識をもち、漢語を維持しようとし、ムスリムとしての意識をもつ。そのためにアラビア語も勉強する。これで言語は三つ習得しなければならない。また、雲南のイスラームや雲南に残してきた家族に深い思いいれがあると同時に、中東で主流のイスラーム解釈の動向にも、また肌や言語が違う南アジアのムスリムの動きからも眼が離せない雲南系ムスリムたち。政治的、経済的、宗教文化的、あるいは言語的な要因が彼らの生き方を規定していく。

評者は数年前、台湾の台北モスクを訪れたことがある。そこのイマームはビルマ出身の雲南系ムスリムだった。きけば、台湾ではイマームの育成が難しくなっているという。台湾には一万人前後のムスリム（回民という）がいるとされるが、子どもたちは今や普通の大学に行くようになり、宗教を専門に勉強できるイマームを養成するような教育環境がないからだという。アラビア語を使った宗教知識があってなおかつ漢語が話せ、台湾にとって政治的にも問題がないイマームは皮肉なことに東南アジアの雲南系ムスリムの間にしか見つからない。雲南系のイマームの招聘なしにはコミュニティが維持できない台湾のムスリムの姿がそこにはあった。そして、さらに興味深かったのは、台北モスクの金曜礼拝で相当数が中東・南インド出身者で占められていたことであった。経済大国はどこでも外国人をひきつける。パキスタン、トルコ、エジプトなどの地の出身のムスリムが雲南系ムスリムのイマームの説教を聴いているという台北の現実は、アジアの冷戦の産物であった大陸／台湾の分断、大陸／東南アジアの雲南系華人といった二項対立の図式が塗り替えられたということをはしなくも物語っている。現在、姿がみえるのはグローバリゼーション、市場経済化とともに世界のムス

リムを結ぶ宗教的紐帯である。そして、本書では触れられないが、ほぼ同じことが中華人民共和国の沿海部大都市で形成されつつあるムスリム・コミュニティでも起こりつつある。中国国内からの出稼ぎムスリムと海外からビジネスチャンスを求めて中国にやってきたムスリムが出会って、大きなイスラーム潮流が生まれているのだ。

本書は雲南系ムスリムという「小さな民」の生き方を膨大なインタビューと文献の裏づけで構成したものである。中華人民共和国の正史にも中華民国の正史にもタイの正史にも、あるいは「イスラーム史」という正史があるとすればそこにも載らなかった人々の姿が映し出されている。「国民の公的な歴史」からこぼれたような「小さな民」の生き方に魅了された王柳蘭のような外部のものにしか描けなかった人間集団の真実がそこにはある。もちろん、本書でその「小さな民」のすべてが描ききれているわけではない。女性（ムスリマ）の声、豊かな台湾に行ったものの声、雲南のムスリムが北タイの雲南系ムスリムへ投げかけるまなざしなど、もう少し書き足してほしかった。しかし、それは次の課題ということだろう。

不便な土地にある「難民村」は人口が都市に移動をしていくことによって緩慢に解体していく運命にあるのだろう。しかし、雲南系でなおかつムスリムであるという雲南系ムスリムの人々の誇りは、タイ国籍を持っても、タイ語が母語となっていっても廃れることはない、という印象を本書からは受けた。彼らはかつて雲南／ビルマ・北タイ国境をさまざまな理由で越えた。一時的に国境が閉ざされたが、それが開けられた現在、彼らが主体的に生きる空間は東南アジアは言うに及ばず中東や南インド、東アジアに拡大している。その多様性・広域性と雲南系ムスリムであるというアイデンティティのあり方の折り合いはどのあたりにつくのだろうか。今後の動向が注目される。